

私の平穏な日々

## パトリック

第二王子。  
華やかな風貌の持ち主。  
我儘な言動が目立つ。

## アンジェリカ

ミカエラの同級生で、  
第二王子の婚約者。  
穏やかな性格だが、  
作法には厳しい。

## アンドリュー

現宰相の令息。  
パトリックの側近候補で  
お目付け役。

## エヴァ

稀少な光魔法の素質を  
見込まれて学院に  
編入してきた平民の少女。

## ミカエラ

前世で過労死し、  
公爵令嬢に転生した少女。  
前世の知識を生かして  
領地の改革に励んでいる。  
魔法の勉強にとっても意欲的。

## セフィロス

伯爵家の庶子で、  
ミカエラの婚約者兼護衛。  
あまり表情が動かず口数も少ない。  
容姿端麗だが、学院では魔道具で  
誤魔化している。

## アヤメ

ミカエラの同級生。  
ミカエラの兄の婚約者として  
勉強に来た隣国の皇女。

## ルシアナ

ミカエラの同級生。  
つんつんした態度をとることが  
多いが根は優しい。

## 登場人物紹介

## 序

思えば忙しなく慌ただしい人生だった。

生まれ持った能力は多分他の人間より高かったのだろう。そのためろくに休みも取れず日々忙しく働き続け……積みも積もった疲労により過労死した、と思われる。

いくつもの案件を放り出す形になってしまったが、最低限の情報共有はしている。自分がこのまま死んでも、誰かが続けてくれるはずだ。

だから、未練はそれほどない。

ただ、本当はもうちょつとのんびり生きてかった。家族や友達と美味しいものを食べ、平和な日々を楽しみたかった。

それだけが未練かもしれない。

いつ目覚めたのかわからない。

気がついたらぼんやり明るい空間を見上げていた。

……確か就業時間が四十時間に近くなつてやつと帰宅して。ようやく三時間は寝られる、と思つてたら頭が割れるように痛くなつたとこまで覚えてる。

死んだ、と思つたけど違う？ 病院？ ……霊安室とかじゃないよね、明るすぎる。

誰かいませんかー、起きましたよー？

「あぶー」

あれ？

「うぶ？」

……何今の、甘つたれた猫の子のような声音は。

体が起こせないのはまだ具合が悪いせいかもしれないけど……なんとか持ち上げた手が視界に入る。

もちもちした柔らかかそうな肌、むっちりした腕。ちっちゃな指先には爪が揃つて……えええー！

「ふ……ふにゃああー!?」

張り上げた悲鳴も、発情期の猫のように甲高い。

「あらあらお嬢様、お目覚めですな」

パニックを起こしてわめいていたら、声に気づいたようで、誰かが寄ってきた。

乳母とか子守とか？ 抱っこが安定してるから、やつぱ乳母かも。

抱き上げられて、ゆらゆら……なんとか落ち着く。

「どうしたの？ ……あら」

「奥様、お嬢様がお目覚めですよ」

声をかけてきたのはもっと若い女性だった。

おお、すごい美女。切れ長の目元が色つぼくて、ちょっと眉を顰めたところなんか、見てて飽きない。

ただしその瞳の色は不思議なブルーグリーン、まるでビー玉みたい。髪も、結つてまとめてあるけど、それにしても目につく鮮やかなシルバーパール。

染めてるにしても強烈な色。でも綺麗。

「あー」

触つてみたくて手を伸ばしたら、乳母（仮）がにっこり笑つて、抱いていた私を彼女に差し出した。

「せっかくですもの、奥様。お嬢様を抱っこしてあげてくださいませ」  
「え、ええ」

気が向かない様子ですね、お母様（予想）。抱っこもなんだか危なっかしいというかちよつと不安定。子ども産んだんだから慣れてよお母様。

でも乳母がついてるってことは、それなりのおうちなんだろう。お母様の服とか、つけてる装飾の類なまいも、かなり豪華な気がする。

「あぶー」

きりつとしたつり目が顔全体の印象を引き締め、ぱつと目を惹ひく美女だ。

だからこの、派手な色彩が残念……なんだろう、お母様芸能人とか？ でも全体的な雰囲気は外見を売りにする人に見えないな。むしろ人の上で指揮する感じ。

なにせよ、この人の子どもなら、見た目は良さそうだな。

「おかあさま？」

間近でお母様を観察していると、下から幼い声が聞こえた。

「う？」

「あらフェリクス」

やつと椅子に座って落ち着いたお母様の腕の中、低くなった視界に入ってきたのは天使。

お母様と同じシルバーパープルのふんわりした髪、ぱつちりお目々は透明感のあるグリーン、メ

ロンソーダの色！ それにミルクのように白く滑なめらかな肌、薔薇色ばら頬ほっぺへに珊瑚さんごの唇。

マジで天使ですよこの造形。いやほんと、生き物なの？ 作り物じゃないよね？

「おかあさま、この子が、ぼくの妹ですか？」

「そうよ。あなたの妹、ミカエラよ。……可愛がつてね、フェリクス」

「はい、おかあさま。……よろしくね、ミカエラ」

「あぶー？」

この天使が『お兄様』ですとー？

なんか知らんけど、赤ん坊になってました。これはあれか、噂の（？）転生ってやつか。  
しかもお約束どおり、ここは異世界らしいです。

だって自分も、髪が青いんだもん。プルネットとか緑の黒髪とか、そういう比喻表現じゃなく。青としか言いようがない、色見本のような鮮やかな色合い。ほんで、お目々は蒼あおっていうかちよつと紫色が入った、お父様とおんなじ色です。

お兄様の姿から想像はついてたが、お父様も美形。ただ、お母様ほどきりつとした感じじゃなくて、もうちよい甘い顔立ち。それでもって、かーなり背が高い。抱っこしてもらったらかなかない筋肉でした。いやムキムキではない、細く見えるけど、触って初めてわかる筋肉。細マッチョ。なかなか華やかな色合いの一家です。お父様の髪も蒼あおっぽい金髪だし。私もその一員に加わりま

した。

使用人の皆さんの髪や瞳の色はおとなしい色彩、茶とか黒・灰色が多くを占めるところから見ると、鮮やかな色彩ってなんらかの意味があるのかも。

使用人が結構いるからそれなりの家柄とは思ってたのですが、公爵家だそう。今いるここは領地のお屋敷。

お父様はまだ公爵ではなくて、お祖父様が公爵だそう。使用人の噂によると、お父様はかなり有能で、すでにお祖父様の片腕としてばりばりやってらっしゃるらしい。

私が見ているお父様は、嫁大好き子ども可愛いのマイホームパパですが。お母様より私を抱っこしたがるし、なんなら気持ち悪くなるほど高い高いしてくる。乳母に叱られてました、お父様。なんでもお兄様の時もやらかしたとか。反省しようよお父様……

「こんな可愛い我が子を可愛がらずにいられようか！」

それはたいそうありがたいんですけどね、ものには限度というものがありません、その辺わかつてる？ お父様。

「まああなた、ミカエラがすっかり疲れていてよ」

はしやぎ疲れてお父様のお膝でぐでーとのびてたら、お母様が抱き上げてくれた。あ、おっぱいおっぱい。

乳母はいるけど、どっちかという子守が仕事。あとはオムツ替え。もちろん母乳が足りない場

合もあるから、そういう時はお乳もくれるらしい。幸い、今のところそちらは足りてる。

実は、お兄様を産んだ時はあんまりお乳が出なくて、人を呼んだらしい。それで今回も備えてあったと。

まあこういうのは体調とかその時々々の環境にもよるし。それもあつてお母様、最初は私の扱いに戸惑ってたみたい。んでも一生懸命おっぱいに吸いつく赤ん坊を毎日抱っこしてりや慣れますわな。すっかり抱っこも安定してお腹もいっぱいです。ごちー。

さて月日の経つのは早いもの。よちよち歩きにつたないお喋りもマスターしてきました。おっぱい以外にも食べるようになったよ、果物すっぱー。

あつちへよろよろ、こつちへよたよた。乳母は今の方が忙しそうだ。でもこれくらいからきちんと動いておかないとね。将来的によく動く体を作るには、よく食べよく動きよく眠るのが一番大事。本当はこの世界の知識にも興味津々だけど、まだお勉強するには早いらしい。文字も教えてもらってない。

「ミカエラ」

「あー、にいに」

お兄様だー。あ、何それその厚い本。お勉強？

よたよたっと突っ込んで、しがみつくついでに覗いてみる。

ちよつとよろけたお兄様、確かまだ四歳か五歳。いくらこつちがちびでも、勢いついてたら支えきれないよね、ごめん。

「ダメだよ、ミカエラ。これはぼくの勉強用だから」

「あー」

でもちよつと見たい。その気持ちを込めてお兄様を見上げたら、小首を傾げられた。うむ天使。

「フェリクスぼつちやま、よろしければミカエラお嬢様と一緒におやつになさいませんか」

「うん、そうだね」

乳母の勧めで、子ども部屋で一緒におやつ。私は果汁と柔らかい果物だけど、お兄様はビスケットっぽい焼き菓子とミルクかな？

甘いものはあんまり出ない。全然ではないけど、子どものいる公爵家での状態、つてことは甘味はそれなりに貴重なんだろう。砂糖がないわけじゃないみたいだけど、普通に使ってるのは蜂蜜かな。あとはメープルとか、その辺のシロップっぽいものだと思う。

「あーう」

おやつごちそうさまー。甘みは薄いけど果物美味しいよ？ 酸っぱいけど瑞々しくて。

綺麗に食べた皿を、乳母が微笑みながら片づけてくれる。

自分で片づけようとしたこともあるけど、他のメイドさん達も飛んできて止められた。そんなに

危なっかしかった？

「あー、にいに、ごほんー」

そうなると気になるのは、お兄様のその分厚い本ですよ。何それ？ おやつの間汚れないよう離して置いてたけど、それでもずつと気にしてたよね？

「あらお嬢様、いけません」

伸ばした手を乳母が遮る。濡れ布巾で手を拭いて……つてべたべただった。この手で触ったらそらあかん。綺麗にしてもらったら見てもいい？

「ダメだつてば、ミカエラ。これはぼくの、魔法の勉強に使うんだから」

……なんですとー!?

異世界で魔法があるなんて、ド定番だけどワクワクするね！ 早く勉強したい。あ、待てよ、魔法があるつてことは、ひよつとして、前世の化学とか物理とかは通用しないのかな？

わーん早く文字覚えたい！ 本読みたい、お父様の書齋に詰め込んである、山のような蔵書！

「にいに、ごほんにいにの？」

お父様の蔵書は多いけど、お母様はそれほど持つてる様子はない。書齋はあくまでお父様の私室って感じ。

女は本読むな、みたいな世界だったら暴れるぞ。

「これはぼくの初めてのの本だよ。ミカエラももうちよつと大きくなったらもらえるから、待つ

てて」

良かったー。

大事そうに本を抱えたお兄様の説明によると、この世界では、子どもに魔法を教える際、最初に一冊の本を持たせる習慣がある。

その本に、子どもが習得した魔法が蓄積されていくのだとか。大人になった時には、自分だけの魔法書が出来上がっているということらしい。

うわおロマン！

ただし魔法は、全ての人が使えろわけではない。血統的に貴族は概ね使えるけれど、生まれ持った魔力の多寡はあるし使いこなすにも技量が必要。そして、魔法の種類には向き不向きもあるとか。そのため、お父様がお兄様に教師をつけて魔法を教え始めたらしい。本人が期待に胸を膨らませているのが伝わってくる。

うんうん、新しいこと学ぶのって胸が躍るよね。いいなあ、早く私もやりたいー。

「フェリクス、ミカエラ」

「お母さま」

「かーさま」

姿を見せたお母様は、お兄様の大事そうに抱えた本に気づいて微笑んだ。

「フェリクスも、魔法の勉強を始めたのね」

「はい、頑張ります」

優しくお兄様の髪を撫でるお母様。お兄様も嬉しそうに笑って、それから尋ねた。

「お母さまの『本』はどちらにあるのですか？ お父さまが、お母さまに聞いてみなさいって言うてました」

「あら、あの人ったら。……私の『本』はここよ」

そう言ったお母様が何やらよくわからない仕種をすると同時に、その手に一冊の本が現れた。お兄様のものより少し大判の、いくらか年季の入った本。金の箔押しがされたかなり立派な上製本だ。

「……これが、王宮魔法師の『本』ですか……!!」

何それめっちゃ強そう！ お母様カッコいい!!

目をきらきらさせているお兄様と私に、お母様が困ったように微笑む。

お母様は元々家柄は高くない。だけど魔法の才能があり、国内最高峰の王宮魔法師にまで上り詰めた。そして王宮で働いていたお父様と出会い、公爵家に嫁いできた、ということらしい。その間には紆余曲折あった模様……というか、やつかまれたり嫉まれたりしたんだろうなー。

王宮魔法師を辞める時にも一悶着あって、それでお母様は過去と訣別したそう。これまで王国のために魔法を使ってきた、今後は公爵家の家族と領民のためにのみ使用する、と誓いを立ててようやく王宮を離れる許可をもらったらしい。

職業選択の自由がないのはキツイな。確かに、能力の高い人が、他の人にできない仕事をするの



は理に適<sup>かな</sup>つてはいるけど。

……この封建的な社会ではしょうがないのかな？　まだはつきりわからないけど、公爵家だの王国だの言ってる時点で身分制度のある封建社会なのは間違いないだろう。となれば、人生に選択の余地は少ない。お母様が王宮魔法師になれたのは、それだけの能力があつて環境にも恵まれた故だろう。もちろん本人も努力したに違いないけど。

そうなるなら私も、将来は政略結婚とかそういう可能性があるわけかー。

……いやいやいや、ナシでしょ。そういう望ましくない方向は避けたい。

お母様が実力で出世したつてことは、まだ絶対的な封建制度じゃない可能性もある。我が家の使用人を見ても、能力があつて真面目に働く者にはそれなりの処遇をしている。それつて能力主義つてことでしょ？

ならば私は。

単なる駒<sup>こま</sup>として生きたくない。政略結婚させられるくらいなら、この家を出て自分一人で生きていけるくらいの能力を身につけよう！　とりあえずそれが、当面の目標！

お兄様の魔法の先生は、お父様より年上のおじさん。土の魔法を得意とするとか。ワカメつばい深緑の髪がすつごく似合わないし、人相もあんまり良くない。

だけど教師としては優れてるつて。頑張つてねお兄様。

お兄様の魔法は、水に特化している。お母様の能力を受け継いだことはそれでもわかるつて……その一方で、自分にもお母様の能力が遺伝してたらいいなあと期待してたりするんですが。魔法は本当に、生まれ持った才能が大きく影響するから難しい。お父様お母様にお願<sup>ねが</sup>いして、お兄様の魔法の勉強、見学させてもらおう。字が読めなくても、話を聞けるだけでもありがたい。

「おとーさま、おかーさま。ミカエラも、おにーさまとまほーのおべんきよ、したいでつ」

だいぶお喋<sup>しゃべ</sup>りできるようになりました！　まだちょつと滑舌悪いけど。なんだ『したいでつ』つ。

まあ『可愛いおねだり』のおかげで、お兄様の勉強に同席する許可はもらいました。もつとも、お母様には、無邪気なおねだりというより「良い心掛けです。知識は、きつとあなたの助けになるでしょう」と励まされました。……お母様の苦勞<sup>しゆら</sup>が偲<sup>しの</sup>ばれるな！

勉強に同席というより、正確には、お兄様と一緒に私も勉強を始めることになりましたよ。お兄様は魔法以外にもいろいろ学び始めてるけど、魔法の時間だけ同じ部屋で私も勉強、つて感じ。

他の勉強は、お兄様とは別でやります。

「それでは、ミカエラ様。本日よりお勉強をお教<sup>し</sup>えいただきますナリアと申します、よろしくお願<sup>ねが</sup>いいたします」

「あい。よーちく、おねまいしましゅ」

頭を下げる女性にべこりとお辞儀。ものを教わる立場として、礼儀は忘れないようにしたい。ナリアは二十代初めくらい？ なんでも、貴族令嬢の家庭教師としての教育を受けた才女だとか。教わるのは読み書き計算と礼儀作法や一般教養が主。

話し言葉はともかく、文字の読み書きは順調。基本の文字や簡単な文法を覚えたらなんとかなる。計算は前世で学んだ基礎があるし、表記は違っても加減乗除のやり方は変わらないからありがたい。とりあえず今は一桁の足し算引き算をのんびり解いてる。最初からあんまり飛ばしても不審だし。歴史や地理は当たり前前に全然違う。なので、子ども向けの絵本『せかいのなりたち』を読んでもらいました。

この世界は神様が作り、人間に与えた。神様は全知全能だが、人間の都合は知らない。だから人間は、神様がなぜか作っちゃった魔物を倒したり、魔物の元になる良くない気を祓<sup>はら</sup>ったりしなきゃいけない。

そのために神様から魔法をもらったそう。魔物は人間を食べたりするから、神様にお願いで魔法が使える人間を増やしてもらった。

最初の人が王族の先祖で、その後は貴族。稀<sup>まれ</sup>に平民でも魔法を使えるのは、昔貴族だった頃の先祖帰りと思われる。まあそういう力のある人は大体貴族の養子にされるそうだけど。魔法使える平民が市井<sup>しせい</sup>にいたら悪目立ちするよね。

魔力の有無は、髪や目の色彩に現れるんだって。さらに色合いと魔力の属性は関連していて、お

兄様の先生のあのワカメ髪も土の魔力を示してるとか。

そして我が家族も。お父様は風の魔力を、お母様は水だけでなく氷の魔力も宿しており、その間に生まれた私とお兄様は、両方を持つ可能性がある。

隣でお兄様の魔法講義を一生懸命聞いてると、なんとなくわかってくる。

魔法って、究極には想像力なんじゃないかな。できる限り精緻<sup>せいせい</sup>な想像と、それに実体を与えるに足る魔力。それらが合わさって『魔法』という現象を起<sup>おこ</sup>す。

こっそり裏庭で、立ったまま瞑目<sup>めいもく</sup>する。お兄様がやってたように、じっと目を閉じ、自分の中に宿る力を見つめる。

先生に頼み込んで見てもらったら、私の持つてる魔力は風属性だって言われた。

……うん、なんだか……このじっとしてない、うずうずと落ち着きない感じ、これかあ……！

「……目に見えないもの、我等の息吹……」  
そっと囁<sup>ささや</sup>く。自分のうちに宿る力に語りかけるように。従わせるのではなく、力を貸してほしいと。共に為<sup>な</sup>そう、と。

胸の前でお腕<sup>うで</sup>のようにしていた掌<sup>てのひら</sup>の中。ふわり、と空気が揺れた。ゆるゆると巡る、弱い風。どんなに弱くても、私の起こした風だ……！

「ふわあ……」

掌をほどくと同時にふっと風が広がるのを、肌だけでなく直感的に感じる。これが、私の

『力』だ。

その後調子に乗ってそのまま風で遊んでたら魔力切れで倒れ、お母様に笑顔でお説教されまして……

さらにあとから気づいたんだけど。風とは別の魔力もあるんだよ、私の中。イメージとしては吸い込むように静かな深い力。

悩んだ挙げ句に、やっぱり裏庭で（ここが一番安全。人来ないし壊れて困るものもないし）伸びっぱなしの叢くさむらに向かってその力を向けてみたら。

脳裏に、「ハコベ種こくまの混植こんしょく。自生種。無害。鳥類や昆虫の食用」と説明文が浮かび上がった……慌ててお母様に相談したら、『鑑定』魔法であろうと言われましたよ。稀まれに発現する、そこそ有用な魔法らしい。

知識が広がれば、鑑定で得られる情報も詳しくなるっていうから、勉強にも身が入るよ！ それでこれも熱中しすぎてまた倒れました……。もちろんお説教付き。

これがあれば、今栽培してる以外に役に立つ作物とか見つけれられるんじゃないかな。できれば栽培に手間がかからなくて、かつ売値の高いものがいい。

……いや虫のいい願いだとは思ったよ、自分でも。だけどそれに合致しそうなもの見つけたら、そりゃ行動せざるを得ないでしょ!?

それに考えてみれば、いや、考えるまでもなく、公爵家に生まれたからこそ、衣食住に不自由なく育ててもらってきた。そうして育てて大きくなったのに、責任とかめんどくさいから嫌です、ってのはあまりに酷ひどいし無責任だ。

だからといって、貴族令嬢としての責務、つまり政略結婚して子孫残す、っていうのも……とでもできそうにない。権力や立場的に『適切な』相手と結婚して子ども作る、なんて自分の性格的に無理。

だったら。養われているうちは、極力公爵家と領地のためになることをして、私がいなくても領内の誰かが継続できるようにしておこう。その上で、お父様にきちんと話して、家を出ることを認めてもらおう。……お兄様に話した方がいいのかな、私の政略結婚を必要とするのは次の世代だろうし。

いやまあ、いずれにしてもいつぱん要相談だ。

「お嬢様、こないだ言ってみたみたいに、こつちにまとめてみただけ」

「何にするんだ、この草」

領地にある孤児院の庭はかなり広い。畑も作ってるけど、ほんの一部。あとは洗濯物干したり小さい子の遊び場だったり。その一角に、鑑定で見つけた植物を植えてもらった。

「こんなの、その辺にいくらでも生えてるじゃん。牛や馬の好きなやつだよな」

「なんで牛や馬が好きなのか知ってる？」

「問いかけながら手近な一本を折り取る。」

「くんくん、嗅いでみると確かに甘い匂いする……！ えい、確認！」

「わあぁ、お嬢様！ いきなり齧らないで！」

「あんた自分まで牛になりたいのか!?」

「などと周りの子ども達は騒いでますが、こっちはそれどころじゃないよ。」

「……甘い！」

「鑑定さん嘘吐かなかった、これサトウキビだ！」

「正確には近似種なんだろう、我が公爵領は本当ならサトウキビが育つ亜熱帯気候じゃない。」

「とりあえずこれで一つ、資金調達の目処は立つね。精製はまだこれからとはいえ、高価な嗜好品である砂糖が生産できれば、十分だ。」

「みんなも味見してみて！」

「百聞は一見に如かず、というか一度味わえばこの有用性はわかるだろう。砂糖が高価ということ、は、甘味も、孤児院の子どもには手の出ない高級品だ。」

「代わる代わるサトウキビを齧った彼等も、納得してくれた。これなら頑張って育ててくれるだろう。とりあえずある程度の量を栽培しないと、精製まで試せないからね。」

「さらに、サトウキビをお父様のところに持ち込んで、事業を始める許可をとった。最初は私の個

人資産で孤児達を雇って、領地全体に広げて公爵家としての事業にできる。」

「ミカエラは、どうやってこんな見つけたの？」

「話を聞いたお兄様、笑顔だけど若干呆れてます？」

「鑑定してみたんです。そしたら砂糖の原料になるって出たから」

「……鑑定って普通、知ってるもの、それに近いものにしか効かないらしいよ？」

「……ああ、そうか。前世の知識も、鑑定の上台にあるのか。……でもそうになると、説明が難しいな!？」

「……え、ええつと」

「言い淀む私にお兄様は溜息を吐いた。ぽんぽん、と宥めるように頭を叩かれる。」

「まあ、鑑定は使えば使うほど精度も上がるそうだから……ミカエラは、いろいろ試してごらん。何かに使えるものがあれば、ぼくやお父様でなんとか形にしてみるよ」

「……！ ありがとう、おにいさま！ えつと、これ、きつとおにいさまの役にも立つから！」

## 第2章 少女期（入学前）

お誕生日おめでどう、お兄様。

今日をもってお兄様ことフェリクス・フォル・オブライエン、十歳になりました。前デビューと呼ばれる、お披露目の誕生会が王都の我が家で開催されます。

お父様が宰相補佐官とかいう、忙しそうな職に抜擢されちゃったのです。現在の宰相はお祖父様の友人で、お父様を貸してくれてお祖父様に交渉したんだって。お父様本人はそんな忙しい仕事嫌だっでごねてたらしいんですが、無事(?)就任しました。

改めて自己紹介します。ミカエラ・フォル・オブライエン、オブライエン公爵家長女でございます。

当年とつて八歳。鮮やかなブルーの巻き髪、わずかに紫がかった蒼の瞳、真っ白な肌と、我ながらお人形のような美少女です。お母様に似て若干きつめの顔立ちだが。

対照的に、お兄様は相も変わらず地上の天使の如く。お母様譲りの銀紫の髪、明るく澄んだ翠の瞳。すつきり通った鼻筋に、笑みをたたえた唇、薔薇色の頬……甘い微笑みの天使様です。前世なら聖歌隊に入ってたそう。

貴族の子どもはこの前デビューを済ませるまであまり表に出ません。裕福な貴族の子でも、幼いうちに儂くなることも少なくない……まだこの世界、衛生とか病気の予防とか、進んでいるとは言えないです。治癒魔法と言われるものもあるんだけど、怪我はともかく病気には効かないことも珍しくはないそう。そもそもめつっちゃ稀少。

そんな事情で、子どもが幼いうちは、あまり表に出さないのが普通。今日招待されたのは、お兄様より先に前デビューを済ませた子ばかり。

……女子率高いな。着飾った女の子達（とはいえ私より年上）はお兄様を見てぼーっとしてます。結構人数いるけど、全員反応おんなじ。お兄様モテモテね。

まああれだけ美形で家柄も良ければ当たり前か。封建的な階級社会ってことは、よほどのことでしてかさない限り身分は安泰だし。まして我がオブライエン公爵家、ここのところ領地も好景気に沸いていますし。

はい、ちよつとやらかしました。孤兒院で育てたサトウキビから、砂糖の生産が始まっています。元々は牛馬の餌だったけど、生産量自体が跳ね上がったから、搾り滓を餌に回すだけでも量は十分。飼料は減ってないよ。むしろ家畜も増えている。それに加えて、小麦と豆の二毛作も始めた。

そんなこんなで、領地はずいぶん栄えています。お兄様も私も、十五歳で王立学院入るまでは王都と領地を行ったり来たりになるはずなので、王都では砂糖始め領地の特産物を宣伝する予定。私じゃなくて、お父様とお母様が。だったらお父様達だけでも良さそうなのに、一緒がいいとお父様

が駄々をこねた。

実のところ、お母様は貴族社会ではあまり立場が良くないらしい。成り上がりとかシンデレラストーリーとか、あれって這い上がる側からは美談扱いでも、上からの視線は厳しいよね。もっともお母様、地道に交流を続け、人脈を広げていたそうです。最後は結局人間力。うちの領地からよそに、いろいろな特産物のやり取りを重ね、国内貿易を確立して。今や、我がオプライエン公爵家は流通の要とも言えるのですよ。

他人任せで領地経営する気のない連中とは違って、お父様もその辺真面目に取り組んでいます。身内びいきかもしれないけど、いい領主だと思う。お父様もお祖父様も。

麦の裏作で導入した豆や芋も、砂糖の増産に合わせて加工しています。甘味だよー、自分の楽しみが一番の理由だったんだけど周りの評判も良く、おかげで高値がついてる！

鶏卵・牛乳は他の領地からの輸入が増えましたが、領地での生産もそれ以上に増大しました。

せっかくなのでお兄様のお披露目に合わせてその甘味もご披露をと、料理人達と協力して頑張ったー。あちこちのテーブルがざわついているのはそのせいかな？

十歳の子どもが主役だから、前デビューは夜会ではありません。お茶とお菓子が主。軽食くらいは出しますが、それもオプライエン公爵家ではB.L.Tサンドや甘さ控えめエッグタルト。

財力を誇示するために甘味を置くことはあっても、普通は硬くて甘みも薄い焼き菓子がせいぜいなよ。ここまで洗練された美味しいものを用意できるのは我が家だけ、という自負があります。

それに。おわかりかな、ベーコンがあるんですよ。塩漬けにしてから薫製にした、日持ちする豚バラ肉は、領地の騎士達も泣いて喜ぶ魅惑の味です。

パンも、他では食べられない柔らかいもの。硬めのものも用意はあるけど、ここでしか味わえないものの方がお客は喜ぶよね。

もちろん私はまだもてなしには出られません。前デビューのさらに前ですから。屋敷の二階からお披露目会場の様子を窺ってる。成功のようで何よりだー。

お兄様はお父様と一緒に、お客様に囲まれてにこにこしている。だけどいい加減、お疲れ気味ね。そりゃそうか、開始して小一時間ほどずつとあの調子だもの。これだけお菓子や軽食があっても、飲み物くらいしか口にできてないんじゃないかな。

終わったらつまめるような軽食を用意するよう、料理長に頼んでおこう。もちろんお父様お母様の分もね。

「お兄様、昨日はお疲れ様でした」

無事お兄様の前デビューは成功しました。むしろ大成功？ 何しろ大盛況で、お客が全然帰らないの。後片づけが今朝までずれ込む騒ぎになりましたよ。

疲労困憊の料理長達が可哀想だったので、今日の朝食は私が作りしました。家族四人分くらいなら、なんとかできます。自分用のフライパンや包丁は作ってもらったし、説明するより実演する方が早

いんだもん。

今朝のメニューは野菜スープとベーコンエッグ、サラダにパン。簡単だけど我ながら美味しいし、お兄様も好きなものばかり。

お兄様、外見は天使だけど、厚切りベーコンとかハンバーグとか、がつつりお肉好きだよ。さすが男の子。お父様もだし、お母様も体が資本だからか、結構しっかり食べます。いいことだ。

昨日が大変だったからね、今日は朝ごはん食べてゆっくり休みましょう。どうせお兄様もこれから忙しくなるだろうし。

「ミカエラ、昨日はありがとう。きみがいろいろ頑張ってくれたから、上手くいったよ」

「あら、お兄様だって頑張っただけでしょう？ 私はお手伝いしただけです」

お兄様本人が頑張ったからこそその成功ですよ。あとどうせなら、頑張ってくれた料理長達も褒めて、ついでにボーナスでも出してあげて。

お父様にお客様が訪ねてきたのは、その日の午後だった。普段なら自宅ではなく王宮に出仕しているお父様も、今日はさすがにお休みをとってうちにいた。それを承知で王宮でなくうちへ来たらなかなか侮れない情報収集力だし、そうでないならかなりの強運だ。

「旦那様、お客様が」

私達と一緒に寛いでいたお父様に、執事が声をかける。

この人はお祖父様の盟友であり、お父様にとっても頼れる人物。お母様も気を許している様子。なのでお兄様や私も可愛がってもらっています。まあ時々やらかしては叱られ論され、甘やかしがちなお父様のバランスをとってくれる良い大人です。

そのよく弁えてる執事が、家族の団欒を承知で邪魔しにくるとは。何か火急の用件か、よほどのつっぴきならい話なのでは。

お母様お兄様と顔を見合っていると、お父様が立ち上がった。

「客、とは誰だ、克蘭ツ？」

「セラファイアー伯爵が、ご子息と一緒にいらっしやいました」

その返答にお父様の表情が変わった。めんどくさそうだった顔が、一瞬で引き締まる。

「わかった、会おう」

——そういうわけでお父様のお客様がきたのは知ってたけど。

「お嬢様。旦那様がお呼びでいらっしやいます」

「はい？」

執事が今度はなぜか私を呼びに来た。お父様のお客様じゃなかったの？ あ、子どもがいたんだっけ。大人の邪魔にならないよう遊んでろとか、そういうこと？ でも男の子じゃなかったかな、お兄様の方が良くない？

悩みながらも、案内されるまま応接室に。

「お父様、お呼びとお伺いしました」

ご挨拶して、淑女の礼。これは家庭教師のナリア先生にもお母様にもしごかれましたからね！

「やあミカエラ。お父様の友達に、もう一度ご挨拶してくれるかな？」

えっ何お父様、まさか子どもを見せびらかしたいだけなの？

言われて向き直った相手は、お父様とはタイプの異なる美形。むしろお母様に雰囲気に近い、きりつとした美貌だ。これだけ美丈夫で女性的な印象にならないのがまたすごい。

「はじめまして。伯爵のセドリック・フォル・セラフィアータです」

「ご丁寧ありがとうございます、フェルナンド・フォル・オブライエンが長女、ミカエラ・フォル・オブライエンでございます」

お父様と同じくらい背が高くても穏やかな笑顔。これは見惚れるよねー。美形過ぎて目が潰れそうなので、鑑賞用で十分ですが。

「私の息子を紹介しましょう。おいで、セフィロス」

呼ばれて伯爵の隣に並んだのは、伯爵そっくりの少年だった。……うわあ何この親子、美しすぎる……！

「……はじめまして、セフィロス・フォル・セラフィアータ、です」

「……ミカエラ・フォル・オブライエンでございます」

『セフィロス』ってこの世界の創世神話に出てくる『建国王の剣』と呼ばれた剣士の名前。……と

いうことはこの美少年、剣士というか騎士の家系なのかな。

「あのねミカエラ」

淑女の嗜みも忘ればかーんと口を開けて彼に見惚れてたら、お父様が笑いを含んだ声をかけてきた。

「はい、なんでしょうお父様」

「フェリクスが天使なら、この子のごはんなんて言うの？」

うひゃああゝ、お父様勘弁してえ〜！

お兄様はだって、天使じゃない？ きらきらで笑顔が華やかで。お側でお喋りしてもお茶しても、目の保養というか。

彼、セフィロスはお兄様以上の美形だけど（お兄様より綺麗な少年がいるなんて、異世界の美形レベルはどーなってるんだ!?）、天使という感じじゃない。緊張してるのか強張った無表情で、ますます硬質な美しさが映える。天使じゃないけど宗教画かぁ!?（逆ギレ）

「……か」

「『か』？」

「かみさま、みたい……」

「……ぶぶぶ」

一瞬の間をおいてお父様が嘖き出した。



それで我に返ったけど、酷くない!? 娘にめっちゃ恥ずかしい発言強いといて噴き出すなんて!? じとつと睨み上げたら、くすくす笑いながら頭を撫でられた。そのまま、ソファセットに誘導される。伯爵家の父子も向かいに腰を下ろすけど、……うう、恥ずかしくて顔が上げられない……

有能な執事がお茶を淹れてくれて、その温もりにする。

あー、お茶いい香り、温かいし。

「ほらミカエラ、お食べ」

まだ笑っているお父様を横目で睨めば、ジャムを載せたクッキーを差し出された。

甘いジャムをたっぷり使ったお菓子は、砂糖生産の副産物だ。

「……ありがとうございます、お父様。伯爵閣下もセフィロス様も、お口に合うかわかりませんが、お召し上がりくださいませ」

さあどうぞ召し上がれ!

そうしないともてなす側が食べられませんからね!

「ありがたいいただきます」

伯爵は、意外に表情が優しいな。決して表情が豊かでも愛想がいいわけでもないんだけど。わずかに浮かぶ表情が穏やかだ。

「……いただきます」

対して息子の方は、本当に表情筋が動かないね。元が綺麗なだけにちよつと迫力があるよ。

が、お菓子を口にした彼が確かに表情を動かしたのを、見た。淡い紫の、宝石みたいな目が一瞬見開かれる。確かめるように口許がゆっくり動いて、わずかに綻ぶ。

「……美味しい」

「そうでしょう?」

これは領内の子ども達も手伝ってくれた、我が国最先端のお菓子ですよ。まだ量産は難しいけど、みんな頑張ってる。

いずれの日かあの子達、そして他の領民の生活を支える一助になればいい。

国内では、オブライエン公爵領は優良な土地だ。主食の麦はかなり収量があるし、芋や豆もさらに収穫を増やした。余ればおのおの備蓄するもよし、請われれば買い取りもする。

サトウキビ栽培も砂糖の生産も順調で、いつか領内でお菓子パーティーをするのが、今の夢。

気がついたらその辺について熱く語ってしまった。伯爵は困ったように微笑んでいるしお父様は笑いを堪えている。そしてセフィロス少年はといえは。

「……ミカエラ様は、なんのためにそんなに一生懸命なのですか?」

すつこく恐る恐る聞かれた。

えっなんか怯えてる? 私怖いことでも言った?

「なんのため、と言われると難しいのですが……大雑把に言うなら、みんな幸せになるためです」



うん、究極にはそういうこと。まだまだこの世界、人が生きていくのは大変で、公爵領でも生まれた子どもの半数は大人になれないという。病気や事故、辺境だと魔物に襲われたりもする。あと多いのが飢え。

食べるものさえあれば救える命がある。病気だって、しっかり食べて体力があれば持ち堪えられ、生きていけば選べる道もある。全員救えないことはわかってるんだけど、それを気にして進めないのはもっと嫌だ。我儘と承知で、行けるとこまで行くよ！

あとは個人の打算もある。将来的に政略結婚とかそういう方向で公爵家の役に立てる気がしないんで、こういうところで頑張るところと。あと領民に顔を売つとけば、将来公爵家から出ることもなくても、居場所が作れるかなとね。

それなりに考えてはいるんですよ、全部お話しすることでもないけど。

もちろん後半は内緒。今はまだお父様やお母様を嘆かせたくないし、お兄様に迷惑かけたくないからね。

「素晴らしい心構えですね、ミカエラ様」

おおう伯爵に褒められちゃったぜ。目がきらきらしてらっしやる……わー美形からの賞賛の眼差しって気恥ずかしい。

「……恐れ入ります。子どもの戯れ言ですわ」

顔火照るわ、はつかしー。下向いちやえ。

「うん、うちのミカエラは自慢の娘だよ」

俯いた頭にお父様の掌が置かれる。ぽんぽん、てされると嬉しくなっちゃう。

はっ、これは前世で言う『撫でボ』ってやつ？

「で、ミカエラ。セフィロスと婚約することになったから、今後よろしくね」

「……はい？」

うっとりしてたらお父様から爆弾発言キター！

がばつと顔を上げたら、真正面からセフィロス少年もこちらを見ていた。視線が合う、と同時にその白い頬にじんわり血の色が広がっていく。

いや他人事じゃないよ、多分私も同様ですよ。どゆことお父様!? そんな楽しそうに頭撫でないでー、全然考えまともらないよー！

お父様から聞かされたセフィロス少年の置かれた状況は、過酷だった。

元々の後継者であった兄君が出奔されたそうで、前伯爵は弟であるセドリック様を妻子と別れさせて、呼び戻したという。さらには、兄の妻であった夫人と再婚させ、伯爵位を継がせたのだとか。その息子のセフィロス少年もよそへ売り飛ばしかねないだの、大丈夫なんですかそんな状況のセラファイアータ伯爵家？

お父様が言うには、さすがに捨て置けないから国から査察を入れる予定なんだって。

この王国内は言ってしまうえば全てが王家のもの、各貴族家はそれを預かり管理しているに過ぎない。にもかかわらず、己れの利のみ求めて領民を疲弊させる者の多いことを、国としても憂慮している、とか。

「もつと早く連絡をくれれば、もう少し穏便な手段も選べただけだね」

お父様はにこやかにおっしゃり、伯爵は申し訳なさそうに肩を落としてらっしゃる。まあ建前上、各貴族家の問題については本来その家で解決することになってるし。いくら親しくても他の貴族におうちの醜聞なんか相談しにくいよね。

で、そういう事情でセフィロスをしばらく預かる理由として、私との婚約を結んでおく、ということらしい。

それならいいかな？ 確かに目立つ美形なもの、今回みたく悪い大人に目をつけられると……伯爵は悪い人ではなさそうだけど、対人折衝とかはダメっぽいよね。

「彼にはミカエラの護衛についてもらおうと思っただよ」

お父様はあくまでにこやかだ。その笑顔で王宮では辣腕を振るっているという噂が、領地の屋敷内まで聞こえてくるけど。

「私、護衛が必要なんですか？」

孤児院へ行ったり屋敷を出る時は、領内でも護衛の皆さんに囲まれてたけど。みんな凶体でつかいから視界が狭いのが困る。安全上しようがないことはわかってるんだけど。でも王都のお屋敷で

はほとんど出歩いてないな。出入りの商人呼んで買物、とかはしたけど。

「王都だと、あまり大人数の護衛はつけられないからね。セフィロスは歳の割に剣の腕が立つそうだし、……ミカエラにも婚約者がいれば、『虫』も寄りつかないだろうから」

ぞわっ。

総毛立ったのは私だけじゃなかったみたい。セフィロスくんも背筋を伸ばして硬直し、伯爵まで一瞬固まった。それでも一つ深呼吸して、お父様に声をかける辺りが大人の余裕かな？

「ミカエラ様なら、他からも婚約の話があつたのでは？」

「望みもしないところからね」

冷やかに笑ってお父様はおっしゃいました。

「第二王子がミカエラと同じ年なんだ。それでいろいろうるさい話も湧いていてね」

うひゃあ、それは回避一択の案件ですね！

王宮に行ったことがなくても噂はそこそこ聞く。前デビュを済ませていない私は基本的に屋敷からは出ないけど、厨房や洗濯場に潜り込むことはよくある。下働き達の愚痴や噂を聞くのは情報収集の基礎だからね！ そうした噂から判断するに、王様の評判は悪くない。

王様個人、というより王宮の政治だね。これは宰相やその補佐たるお父様の手腕もあるだろう。

今現在、王宮には三人の王子と二人の姫がいるそう。第一王子は確かフェリクスお兄様と同学年くらい、王妃様の産んだ二人目の子ども。第一子は姫ですでに学院入学済のはず。

問題の第二王子は唯一側室の子どもだ。お父様はこの側室が好きではないらしく、たまに話題に上ると真つ黒な笑みを浮かべている。お母様もこの人とは反りが合わないらしい。

だったらほっといてくれればいいものを、側室の方がお茶会とかにお母様を呼び出すの。それも、お父様を怒らせてるみたい。

まあ公爵家だから、王家とはそれなりに付き合いがあるんだよね。私は会ったことないけど、お兄様も第一王子との面識はあるみたい。お父様に至っては、職場が王宮だし元々王様自身とも個人的な親交があるそう。同じ年頃だと学院に同時期に在籍してたり、親しくなくても顔くらいは見知っているらしい。

そのお父様も、王様個人はともかく、王族に必要な以上に関わる気はないってことかな？ だったらありがたいんだけどー。

「……セフィロス様」

「はい、なんでしょかミカエラ様」

きりつと姿勢を正したセフィロスくんはやっぱり美形だ。同い年だったら八歳だよ、これで可愛いというよりか美しいのってどうなんだ？

確かにこれだけ美人さんだったら、トラブルは多そうだな……私で虫除けになるかな？ まあ仮にも公爵令嬢（笑）だし。

「ご迷惑をおかけするかもしれませんが、婚約をお願いしてもよろしいでしょうか」

「は、はい。……ご迷惑をおかけするのは、私の方だと思いますが……」

その辺はお互い様。だけどそのこともきちんと理解してるようで安心しました。

「では今後とも、よろしくお願いいたします」

座ったままでも礼をとると、彼も居住まいを正して礼を返してくれる。

多分すぐく真面目なのねー。まだ緊張もしてるっぽいけど、元からの性格とみた。

「それでは、セフィロス様。今後のことを考えて、いくつかが相談したいのですが」

「……なんでしょうか」

「まず婚約者ということになりますと、この先前デビューの際などもエスコートをお願いすることになります。私もそれに相応しくあるよう努力いたしますので、セフィロス様もご協力ください」

「はい、もちろんです」

「それから、先々のことになりましたが。……万が一、他に大切な方ができたらおっしゃってください。無理強いて関係を歪めることは本意ではありません」

大事なことだよ。言わば政略的な婚約だし、人間の感情は理屈ではどうしようもないからね。他に好きな相手ができたら、そっちを選んだ方がいい。

「……それは、ミカエラ様ではありませんか？ 他に想う相手がおられるのなら……」

あ、そう来るか？ 真面目な上に律儀なのね……

『今は』「いけませんよ」

にっこり。

つまり『将来のことはわからないよね、お互いに』ということですよ。わかってくれたようですよ。

お父様は公職に就いたので、なかなか王都を離れられない。だけど家族は別だ。

私達家族はしばらく王都と領地を半年ごとに行き来することになった。……参勤交代のようだ。

社交と領地運営を両立させようと思うところなるらしい。領地にはお祖父様もいらっしやるんだけどね。

そしてもちろん、護衛兼婚約者のセフィロス様——改めセフィロスも一緒。

「セフィロス、オブライエン領は初めてでしょ」

「はい」

「うちはちよっと他とは違うから。きみは他の領地もあまり知らないと思うけど、うちを基準にしない方がいいよ」

私の問いかけに頷いたセフィロスに、お兄様が真顔で付け加える。

まあうちはちよっと特殊だね。まだ道半ばながら、無償で子どもに読み書きを教え、大人には低利で資金の貸付けをしたり、生産量が増えた農産物の加工産業を興したりと、働き口を増やしている。もちろん農業畜産を始めとする第一次産業従事者も増えた。

そして領地の一番奥、最大の危険地帯である『深魔の森』では、お母様が統率する警備隊が魔物の間引きに当たり、近在集落の人間もそれに加わるための訓練を始めている。報酬も出すけど、一番の目的は、彼等が少しでも自分の力で自分達の家族や土地を守るようになることだ。

この世界には魔物という危険な生物がいる。大概は巨大な野生動物といった見た目だけ、狂暴で人喰いも珍しくない。体内に魔石という魔力の結晶を宿すものもいて、この魔石が、魔道具の動力源になる。ちなみに私もお母様と一緒に魔物討伐に加わってます。

あとね、魔物の肉や皮つて、素材としてとても有用。

肉は食べると魔力が増える気がするし、何より美味しい。毛皮や牙・爪なんかも武器や防具に加工するのいい品ができる。蜘蛛や、繭を作る類いの虫系魔物の糸を織ったら、すごく綺麗かつ防刃性の高い布ができました。刃物を通さないのに着心地がいい、不思議な衣服一式を作ったり。

あ、セフィロスの分も作ってもらえないかお母様に相談してみよう。私の護衛なんだから、防衛は必要だよ。

「うーん、深魔の森への同行はしばらく落ち着いてからでもいいんじゃない？ とりあえず領地で慣れてから」

つい先走ってしまう私をお兄様が笑顔で窘める。

「えっと、一度お母様とお話した方がいいかしら」

「そうだね。……セフィロスは、お母様とは話した？」

「公爵夫人には、ご挨拶はさせていただきました」

お兄様の問いにセフィロスは固い表情で頷いた。

……口数が少ないんだよね、多分元から。話しかけられれば答えるけど、自分からは口を開かない。その応答も、必要最小限というところだ。

お兄様とも、同じ男の子だし歳も近いし、もうちょっと仲良くなるかなーと思ってただけど。

まだ微妙に距離がある感じ。

まあいきなり連れてこられたセフィロスにしても迎えた側のお兄様にしても、その距離を測りかねてるのかな。

こういう問題は昔から得意じゃない。自覚もあるので、お母様に相談してみました。

「……二人がどう、というよりは、まだセフィロスが環境の変化に慣れていないのかもしれないよ？」

「……『環境の変化』……なるほど」

さすがお母様。すごく納得いく答えだ。

「それよりも、あの子はどれくらい使えるのか、確認しておきたいわ」

ん？

「なんとと言っても、セドリック殿の息子ですから。彼が自分の子を鍛えていないとは思えないです」

……お母様、にこやかにおっしゃってますが、なんというか……わくわくしてる？ 楽しみ？  
「どれだけの腕を見せてくれるか、本当に楽しみ」

……ヤバイスイッチ入った気がする……ごめん、セフィロス……

そういう次第で、お母様とセフィロスと三人で、深魔の森にて討伐を行うことになりました。私自身はお母様と一緒に、もしくは深魔の森に常駐する部隊も交えての実践はこなしていたけれど。

「セフィロス、危険地帯ではあるけど大丈夫よ。とりあえずの慣らしだし、あなたは私を守るから」

「え……」

笑いかけたらすごく微妙な顔された。そして彼が何か言うより早く、お母様から突っ込みが入る。

「ミカエラ、安易に『守る』などと言ってはいけません」

「お母様……でも」

「あなたとセフィロスが危機に陥<sup>おひ</sup>つたら、私はあなたを守らなくてはならないわ。その時、あなたが無理にセフィロスを守ろうとするなら、どちらも守り切れなくなるかもしれない。……そして、万が一にでもセフィロスを守ったあなたが怪我したりしたら、それはどういことになるかわかりますか？」

……とてもマズいことになるのはわかります。私一人で責任取り切れない、ということよね……

「……わかりました、お母様。ごめんね、セフィロス」

「いえ、謝らないでください、ミカエラ。私はミカエラの護衛になるんだから、その相手に守られては、護衛として失格だと思います」

セフィロスは口数が多くない。だけど、言うべきことはきちんと言おうとしてくれる。……本人は話すことは苦手だと言うけど、それこそ話さなきゃ上達しない。いくらでも話して、と頼んでいる。それでも普段はまだ遠慮があるんだけど、こんな風に、きちんと言おうとしてくれるその心意気が嬉しい。

「良い子ね。……ですがセフィロス、あなたもまだ不慣れ。とりあえず今回は、森の雰囲気慣れることを心がけなさい」

「はい、ありがとうございます」

ところでお母様、私の時は初回から魔物の弱点だの攻撃の回避手段だの、お教えいただいた気がするんですが、え、自分一人で小さい魔物狩りしてた人が何言ってるんだって話？

さて、深魔の森は、オプライエン公爵領のみならず、王国内でも有数の危険地帯だ。濃い魔力によって魔物が多く生息するこの地は、過去にはあふれる魔物で公爵領を壊滅させた歴史がある。何度か討伐隊が組織され、今のところは落ち着いている。その安寧<sup>あねい</sup>には、お母様の力が寄与<sup>きよ</sup>していた。

なんとと言っても王宮魔法師だったのだ。その能力は高い。もちろんそんな母を親に持つ私も、年

齡の割には使えるつもりだよ。でなきや、お母様が同行させるはずがないでしょう。

バキバキと樹木をへし折りながら暴れているのは、巨大な蛇だ。毒はなくてただ狂暴で力が強いだけ……とは言いが、それだけでもただ者ではない。

「ちよ、ミカエラ！ 危ない!!」

「行って、セフィロス！ 弱点は喉元！」

さすがに魔物討伐が初体験のセフィロスは慌てて声をかけてくるけど、逆に私から大声で指示を出してやる。

セフィロスは、伯爵に郷里の騎士団に放り込まれて鍛練してきたという。大人とも渡り合えるほどの剣の腕だが、基本的に対人想定 of 戦い方しか学んでないようだ。魔物に対するのが初めてというところもあって、戸惑いが大きいみたい。

だったら大事なものは慣れと経験だよ！ というわけで魔物を誘き寄せては魔法で迎撃し、セフィロスにも攻撃させる。もっとも、最初セフィロスはまったく動けなかった。

「セフィロス、一旦退いて動きをよく見なさい」

お母様もついてるから、大丈夫だよ。

「大丈夫、セフィロスならできるよ！ 目がいいし、体も動いてるから！」

動けない人は本当に動けないの、たとえ歴戦の騎士でも魔物討伐に向かない人はいる。

冒険者ならまた別の話だけど。彼らは、魔物を討伐してその報奨金をもらったり素材を売りさ

ばいたりするのが仕事の人達だ。場合によっては貴族とか商人の護衛をして盗賊退治とかもするそうなの。

しばらくそうして経験を積んで、深魔の森やそこに棲みつく魔物に慣れる。回数をこなせば、確実に経験値が上がる。

ゲームのようにレベルが目に見えるわけではないけれど、それでも数をこなすことが上達の近道なのはこの世界でも同じだ。特に魔物討伐では、同じ魔物を続けて討つと、同種あるいは近似的種を倒しやすくなる気がする。

セフィロスは最初から腰が引けることがなかった。驚いてはいたけどびびってはいない。ぎこちなくても必死でついてきてくれて、すごく上達が早い。……まあそれだけ引つ張り回してるからなあ。

おかげでセフィロスの戦闘力もどんどん上がり、二人だけでの深魔の森への討伐が認められるほどになった。



セフィロス・フォル・セラフィアータにとって、ミカエラ・フォル・オブライエンは言わば彼の人生を照らす光だ。

行くべき途を見出せず、このまま流されているのはダメだとわかっているのにそれに抗する術もなかった。新たに父の妻となった女性には、彼を裕福な家に売り飛ばすつもりで、それを隠しもしない。父や領地の騎士達はなんとかしようとしていたがなかなか上手くいかず。

焦りと諦念に閉ざされていた彼の世界に差した光、その未来を照らし出すもの。

もちろん父達大人の判断だったこともわかっている。それでも、彼女が自分を受け入れてくれたからこそ、選べた途であるのも確かなのだ。

「セフィロス、孤児院行くから一緒に行こう」

セフィロスは、ミカエラの護衛として彼女の行くところにはどこへでもついていつている。王都の屋敷から公爵家の領地に帰ってもそれは変わらない。

彼女の家族は一癖も二癖もある人達だ。

父親のフェルナンドはいつも笑顔ながらもなかなか容赦ない人物で、父とは互いに認め合う友人だ

とか。母親のガブリエラ夫人は、セフィロスの身の上を同情するより励ましてくれる、逞しく苛烈な女性である。

そしてもう一人の家族も、一筋縄ではいかない。

「ミカエラ、ぼくも一緒に行くよ」

「お兄様が一緒だと、みんな驚きますね」

声をかけてきたフェリクスは、父親と同じようにいつも笑顔だ。だがまだセフィロスのことを警戒している。大事な妹を預けるに足るかを見極めているのだろう。

ミカエラが領地の孤児院に行くのは、慰問としてというより遊びのようだ。孤児達も、ミカエラを領主のお嬢様ではなく、毛色の違う友達として受け入れている。

「あ、ミカエラ様だー」

「ミカエラ様こんにちはー」

「フェリクス様もいるー」

「……あれ、そっちの子は？」

ミカエラを見つけて子ども達が群がってきた。その子達が、見知らぬセフィロスに気づいて首を傾げている。そこへフェリクスが微笑みながら告げた。

「彼はセフィロス、ミカエラの護衛だよ」

その言葉に顔を見合わせた子ども達が声を揃えて言う。

「ミカエラ様に護衛なんかいるの!？」

「!？」

一応公爵令嬢のミカエラには、常時大人の護衛がついている。にもかかわらずこう言われる辺りが、ミカエラらしさだった。そのことを否応なしにセフィロスも思い知る。

魔物討伐が許可される頃になると、フェリクスや領地の子ども達も、セフィロスを認めて受け入れてくれた。

「正確に言えば、きみならミカエラのお守りを任せて大丈夫かなって」

「……フェリクス様」

複雑な顔をするセフィロスに、フェリクスが微笑む。いつもの張りついたような笑顔ではなく、共犯者に対して向けるものだ。

「ミカエラは、武力じゃ国内でも随一だよ。だけど戦い方は魔法に大幅に偏ってるから。セフィロスは剣を、あの子に捧げてくれる？」

「言われるまでもありません。……ただミカエラ自身は、そういうことを望まないのでは？」

「まあね。ただいろいろな意味で、あの子には重石が必要だ」

ミカエラの有するものが物理的な力なら、フェリクスは政治力を父から受け継いだ。妹より一足早く王立学院に入学した彼は、あちこちに知己を得て、人脈を広げてますますその力をつけている

らしい。

他の子ども達も、彼女に対する信頼は篤く、その分案じてもいる。その無茶に巻き込まれがちなセフィロスには同情的かつ信を置く者も増え、おかげで同年代の友達ができた。

ミカエラは前向きな努力家で、弱者に対しては優しい。だが彼女にとって領地の子ども達は弱者でなく、共に成長すべき存在のようだ。

読み書き計算に始まり剣の使い方や針仕事に料理と、将来役に立ちそうな諸々を、自身と一緒にやらせたがる。やる前から逃げることだけは許さない。なかなか厳しいところもあり、いかにもあの母の娘だと感じたのだった。